

環境保全型農業直接支払交付金について

令和2年11月

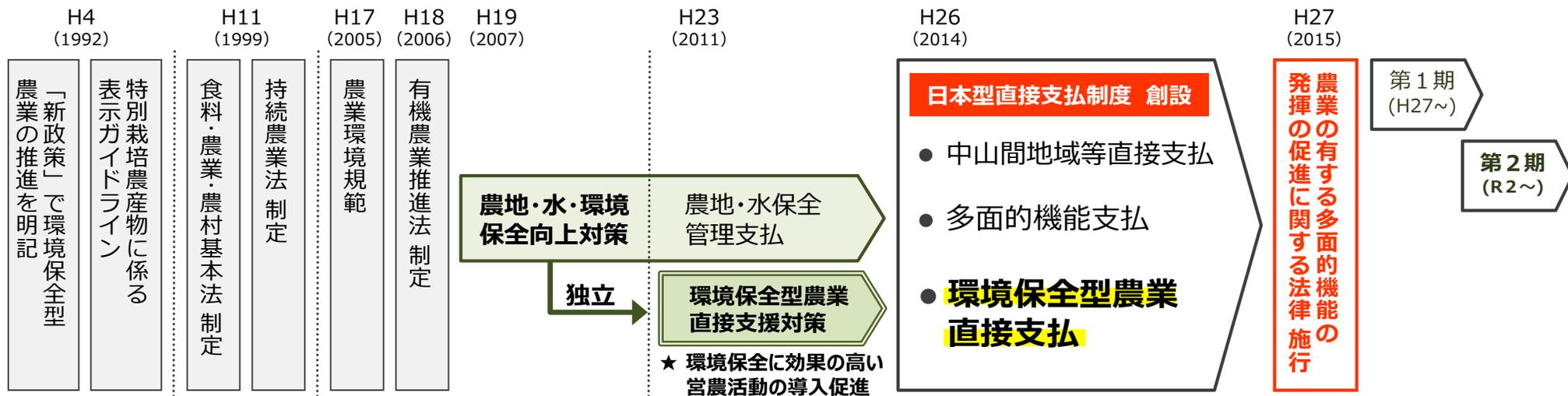
農林水産省

目次

1	環境保全型農業に係る施策の変遷	1
2	農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律の概要	2
3	日本型直接支払制度の概要	3
4	環境保全型農業直接支払交付金の制度の概要	4
5	対象となる農業生産活動	5
6	支援対象農業者の要件、事業要件	6
7	交付ルート	7
8	対象者	8
9	環境保全型農業直接支払交付金の実施状況	9
10	第1期（平成27年度～令和元年度）における第三者委員会による評価	10
	（参考1）第1期における第三者委員会開催実績	11
	（参考2）環境保全型農業直接支払交付金 最終評価結果（第1期）	12

1 環境保全型農業に係る施策の変遷

- 平成19年度から開始した「農地・水・環境保全向上対策」において、**地域ぐるみで化学肥料及び化学合成農薬を5割以上低減する取組に対する支援**（環境支払）を開始。
- 平成23年度には、国際的な動きとして地球温暖化防止や生物多様性保全への対応が急務となる中、農地・水・環境保全向上対策から環境支払を独立させ、「環境保全型農業直接支援対策」を創設。**地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動への支援**を開始。
- 平成26年度に、農業、農村の有する多面的機能の維持・発揮を図るため、中山間地域等直接支払、多面的機能支払及び本対策を「日本型直接支払制度」として位置付け。**平成27年度から、「農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律」に基づく制度として「環境保全型農業直接支払」を実施**。実施期間は5年間であり、令和2年度から第2期が開始。



【食料・農業・農村基本計画】 (R2.3)

- **気候変動に対する緩和・適応策の推進**（抜粋）
堆肥の施用等地球温暖化防止等に効果の高い取組を推進するため、環境保全型農業直接支払制度において、支援取組の効果の評価を行い、より環境保全効果の高い取組への支援の重点化を図り、全体の質の向上と面的広がりを両立させるほか堆肥・バイオ炭等の施用による炭素の貯留効果の分析等についての検討を行う。
- **生物多様性の保全及び利用**（抜粋）
生物多様性保全効果の見える化を通じ、有機農業や土着天敵の利用等、生物多様性保全に効果の高い取組を推進する。
- **多面的機能の発揮の促進**（抜粋）
農業の有する多面的機能の適切かつ十分な発揮のための地域資源の共同保全活動、中山間地域等における農業生産活動、自然環境の保全に資する農業生産活動等への支援を行う日本型直接支払制度（多面的機能支払制度、中山間地域等直接支払制度及び環境保全型農業直接支払制度）について、構成する3制度の連携強化を図りつつ、集落内外の組織や非農家の住民と協力しながら、活動組織の広域化等や人材確保、省力化技術の導入を推進する。

2 農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律の概要（平成26年6月）

基本理念

1. 農業の有する多面的機能が、国民に多くの恵沢をもたらすものであることを踏まえ、その発揮の促進を図る取組に対し、国、都道府県及び市町村が相互に連携を図りながら集中的かつ効果的に支援を行うことを旨として、その発揮の促進が図られなければならない。
2. 農業の有する多面的機能の発揮の促進に当たっては、その発揮に不可欠であり、かつ、**地域における貴重な資源である農用地の保全に資する各種の取組が、長年にわたって農業者その他の地域住民による共同活動により営まれ、良好な地域社会の維持及び形成に重要な役割を果たしてきている**とともに、農用地の効率的な利用の促進にも資するものであることに鑑み、当該**共同活動の実施による各種の取組の推進**が図られなければならない。（第2条）

計画制度

1. 農林水産大臣による「**基本指針**」の策定（第4条）
2. 都道府県知事による「**基本方針**」の策定（第5条）
3. 市町村による「**促進計画**」の作成（第6条）
4. 農業者団体等による「**事業計画**」の作成・実施（第7条）

対象となる取組

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 農地、農業用水等の保全のための地域の共同活動により行われる次の取組 | 【 多面的機能支払 】（第3条第3項第1号） |
| イ 水路、農道、農地法面等の機能を維持するための取組 | （農地維持支払） |
| ロ イの機能を増進するための改良、補修等の取組 | （資源向上支払） |
| 2. 中山間地域等における農業生産活動の継続を推進する取組 | 【 中山間地域等直接支払 】（第3条第3項第2号） |
| 3. 自然環境の保全に資する農業生産活動を推進する取組 | 【 環境保全型農業直接支払 】（第3条第3項第3号） |

事業計画に記載された事業の実施に対する措置

国、都道府県及び市町村による費用の補助（第9条）

3 日本型直接支払制度の概要

- 農業・農村は、国土保全、水源かん養、自然環境保全、景観形成等の多面的機能を有しており、その利益は広く国民全体が享受しているが、近年、農村地域の高齢化、人口減少等により、地域の共同活動等によって支えられている多面的機能の発揮に支障が生じる状況。
- また、地域の共同活動の困難化に伴い、担い手への水路、農道等の地域資源の維持管理の負担が増大し、担い手による規模拡大が阻害されることも懸念される状況。
- このため、「農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律」に基づき、農業・農村の多面的機能の発揮のための地域活動や営農の継続等に対して支援を行い、多面的機能が今後とも適切に発揮されるようにするとともに、担い手の育成等構造改革を後押ししていく必要。

<制度の全体像>

※ 金額は、R2年度予算額（括弧内は、R元年度予算額）

多面的機能支払 48,652 (48,652) 百万円

農地維持支払・・・多面的機能を支える共同活動を支援

※ 担い手に集中する水路・農道等の管理を地域で支え、規模拡大を後押し

- 【支援対象】
- 農地法面の草刈り、水路の泥上げ、農道の路面維持等の基礎的保全活動
 - 農村の構造変化に対応した体制の拡充・強化、地域資源の保全管理に関する構想の作成 等



農地法面の草刈り



水路の泥上げ



水路のひび割れ補修



植栽活動

資源向上支払・・・地域資源（農地、水路、農道等）の質的向上を図る共同活動を支援

- 【支援対象】
- 水路、農道、ため池の軽微な補修
 - 植栽による景観形成や生態系保全などの農村環境保全活動
 - 施設の長寿命化のための活動 等

中山間地域等直接支払

26,100 (26,091*) 百万円

中山間地域等において、農業生産条件の不利を補正することにより、将来に向けて農業生産活動を維持するための活動を支援



中山間地域
(山口県長門市)

* 令和元年度予算は中山間地農業ルネッサンス推進事業分（252百万円）を除いた額

環境保全型農業直接支払

2,451 (2,451) 百万円

自然環境の保全に資する農業生産活動の実施に伴う追加的コストを支援



有機農業



堆肥の施用



カバークロープ

4 環境保全型農業直接支払交付金の制度の概要

- 農業者等が実施する化学肥料・化学合成農薬を原則 5 割以上低減する取組と合わせて行う地球温暖化防止や生物多様性保全等に効果の高い営農活動に取り組む場合に支援を実施。
- 地球温暖化防止や生物多様性保全等に効果の高い営農活動として、全国共通の取組のほか、地域の環境や農業の実態等を勘案した上で、地域を設定して支援の対象とする地域特認取組を都道府県の申請に基づき設定し、支援を実施。

対象となる取組

化学肥料・化学合成農薬を原則 5 割以上低減する取組

+

+

地球温暖化防止に効果の高い営農活動



有機農業



堆肥の施用



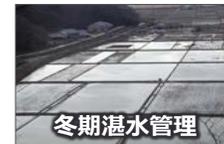
カバークロップ

等

生物多様性保全等に効果の高い営農活動



有機農業



冬期湛水管理



総合的病害虫・
雑草管理 (IPM)

等

土壤中に炭素を貯留し、地球温暖化防止に貢献

様々な生物を地域で育み、生物多様性保全に貢献

交付単価 (R2年度～)

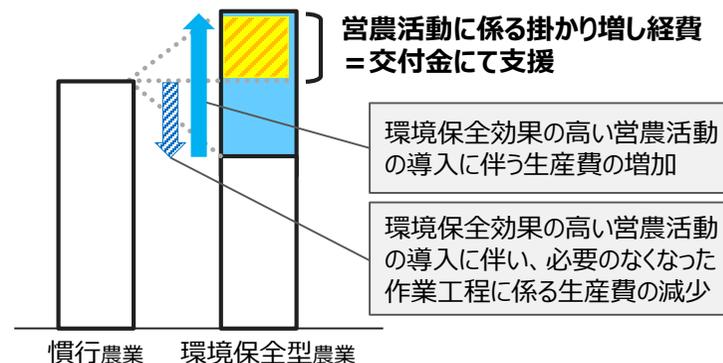
全国共通取組		交付単価 (円/10a)
有機農業	そば等雑穀、飼料作物以外	12,000
	このうち、炭素貯留効果の高い有機農業を実施する場合 ^{注)} に限り、2,000円を加算。	
	そば等雑穀、飼料作物	3,000
堆肥の施用		4,400
カバークロップ		6,000
リビングマルチ (うち、小麦・大麦等)		5,400 (3,200)
草生栽培		5,000

全国共通取組	交付単価 (円/10a)
不耕起播種	3,000
長期中干し	800
秋耕	800

地域特認取組
交付単価は、都道府県が設定します。

! 本制度は予算の範囲内で交付金を交付する仕組みです。申請額の全国合計が予算額を上回った場合、交付額が減額されることがあります。配分に当たっては、全国共通取組が優先されます。

❖ 交付単価は営農活動に係る「掛かり増し経費」に着目して設定



注) 土壌診断を実施するとともに、堆肥の施用、カバークロップ、リビングマルチ、草生栽培のいずれかを実施していただきます。

5 対象となる農業生産活動

〈全国共通取組〉



有機農業

化学肥料・化学合成農薬を使用しない取組。
国際水準の有機農業の実施が要件
※ 有機JAS認証の取得は必須ではありません
(そば等雑穀・飼料作物以外は12,000円/10a、
そば等雑穀・飼料作物は3,000円/10a)

★ 有機農業の加算措置について

有機農業における環境保全効果をさらに高めるため、土壌診断を実施するとともに、堆肥の施用、カバークロップ、リビングマルチ、草生栽培のいずれかに取り組む場合、2,000円/10aが加算されます。

※ そば等雑穀・飼料作物以外を主作物とするものに限りません。



堆肥の施用

主作物の栽培期間の前後のいずれかに
堆肥を施用する取組
(4,400円/10a 等)



不耕起播種

前作の畝を利用し、畝の播種部分のみ
耕起する専用播種機によって播種を
行う取組 (3,000円/10a)



カバークロップ

主作物の栽培期間の前後のいずれかに
カバークロップ (緑肥) を作付けする
取組 (6,000円/10a)



長期中干し

14日以上の中干しを実施する取組
(800円/10a)



リビングマルチ

主作物の畝間に緑肥を作付けする取組
(5,400円/10a 等)



秋耕

主作物の収穫後 (秋季) に耕うんを
する取組 (800円/10a)



草生栽培

果樹又は茶の園地に緑肥を作付けする
取組 (5,000円/10a)



地域特認取組

地域の環境や農業の実態等を勘案した上で、
都道府県が申請を行い、地域を限定して
支援の対象とする取組

例：冬期湛水管理※

※ 鳥類の生育場所の確保等を目的に冬期間の水田に
水を張る取組

6 支援対象農業者の要件、事業要件

<支援の対象となる農業者の要件>

販売を目的に生産を行っていること



国際水準GAPを実施していること

食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理に関する農業生産工程管理の取組について、指導・研修等を受講し、その内容を実践。



<事業要件>

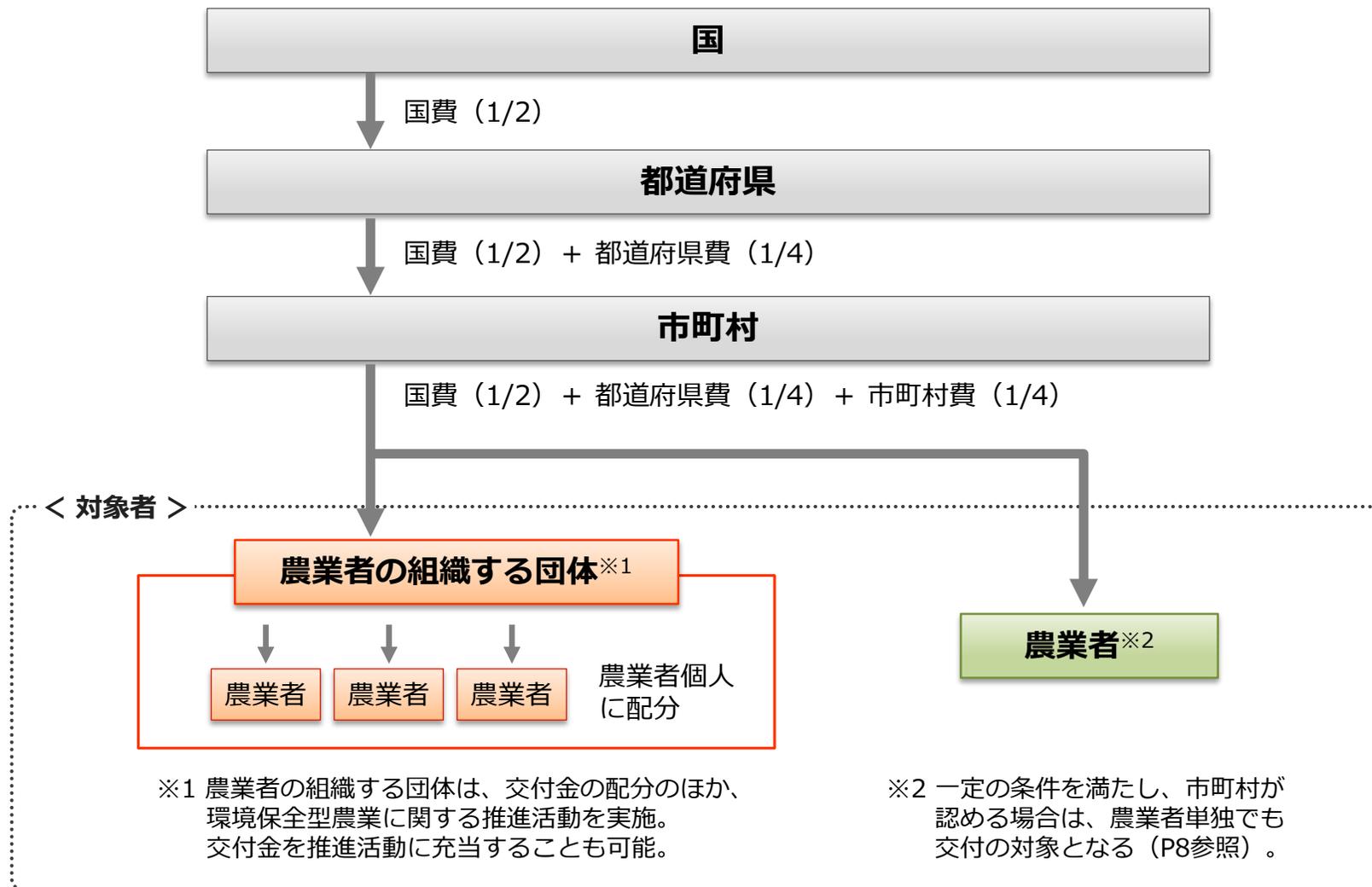
自然環境の保全に資する農業の生産方式を導入した農業生産活動の実施を推進する活動（推進活動）を以下の①～⑪の中から1つ以上実施

- ① 技術マニュアルや普及啓発資料などの作成・配布
- ② 実証圃の設置等による自然環境の保全に資する農業の生産方式の実証・調査
- ③ 先駆的農業者等による技術指導
- ④ 自然環境の保全に資する農業の生産方式に係る共通技術の導入や共同防除等の実施
- ⑤ ICTやロボット技術等を活用した環境負荷低減の取組
- ⑥ 地域住民との交流会（田植えや収穫等の農作業体験等）の開催
- ⑦ 土壌診断や生き物調査等環境保全効果の測定
- ⑧ 耕作放棄地を復旧し、当該農地において自然環境の保全に資する農業生産活動を実施
- ⑨ 中山間地及び棚田地域における自然環境の保全に資する農業生産活動を実施
（農業者団体等の取組面積の過半が中山間地又は指定棚田地域の場合に限る。）
- ⑩ 農業生産活動に伴う環境負荷低減の取組や地域資源の循環利用
- ⑪ その他自然環境の保全に資する農業生産活動の実施を推進する活動

多面法の基本理念に基づき、地域の農業者の連携等により環境保全型農業の普及推進を図ることを目的として事業要件を設定

7 交付ルート

- 環境保全型農業直接支払交付金の交付先は、農業者グループや多面的機能支払の活動組織等の「農業者の組織する団体」を基本とし、交付金はこれらの団体を通じて農業者個人に配分。
- このほか、「農業者の組織する団体」と同様の取組を実施する農業者として市町村が特に認める場合には、農業者単独で対象。



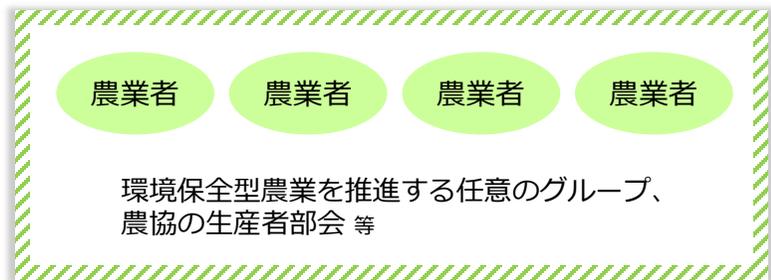
8 対象者

1. 農業者の組織する団体

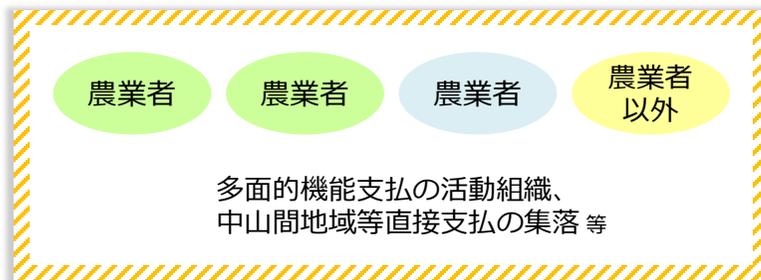
複数の農業者、又は複数の農業者及び地域住民等の地域の実情に応じた者によって構成される任意組織が対象となる。同一の団体の中に、対象活動に取り組む農業者が2名以上いることが必要。

農業者の組織する団体の例

【対象活動に取り組む農業者で構成】



【対象活動に取り組む農業者以外の者を含めて構成】



農業者 は、対象活動に取り組む農業者

農業者 は、対象活動に取り組んでいない農業者

2. 一定の条件を満たす農業者

以下の①～③のいずれかに該当する事業者であって、市町村が特に認める場合、対象となる。ただし、②については令和4年度までの措置とする。

① 集落の耕地面積の一定割合以上の農地において、対象活動を行う農業者

- 対象活動の取組面積が、自身の耕作する農業集落の耕地面積の概ね1/2以上となる農業者
- 同一市町村内の対象活動の取組面積が、全国の農業集落の平均耕地面積の概ね1/2以上となる農業者

※ 土地利用型作物以外については2割以上



② 環境保全型農業を志向する他の農業者と連携して、環境保全型農業の拡大を目指す取組を行う農業者 **令和4年度まで**

推進活動を、環境保全型農業を志向する他の農業者と連携して実施する農業者



③ 複数の農業者で構成される法人

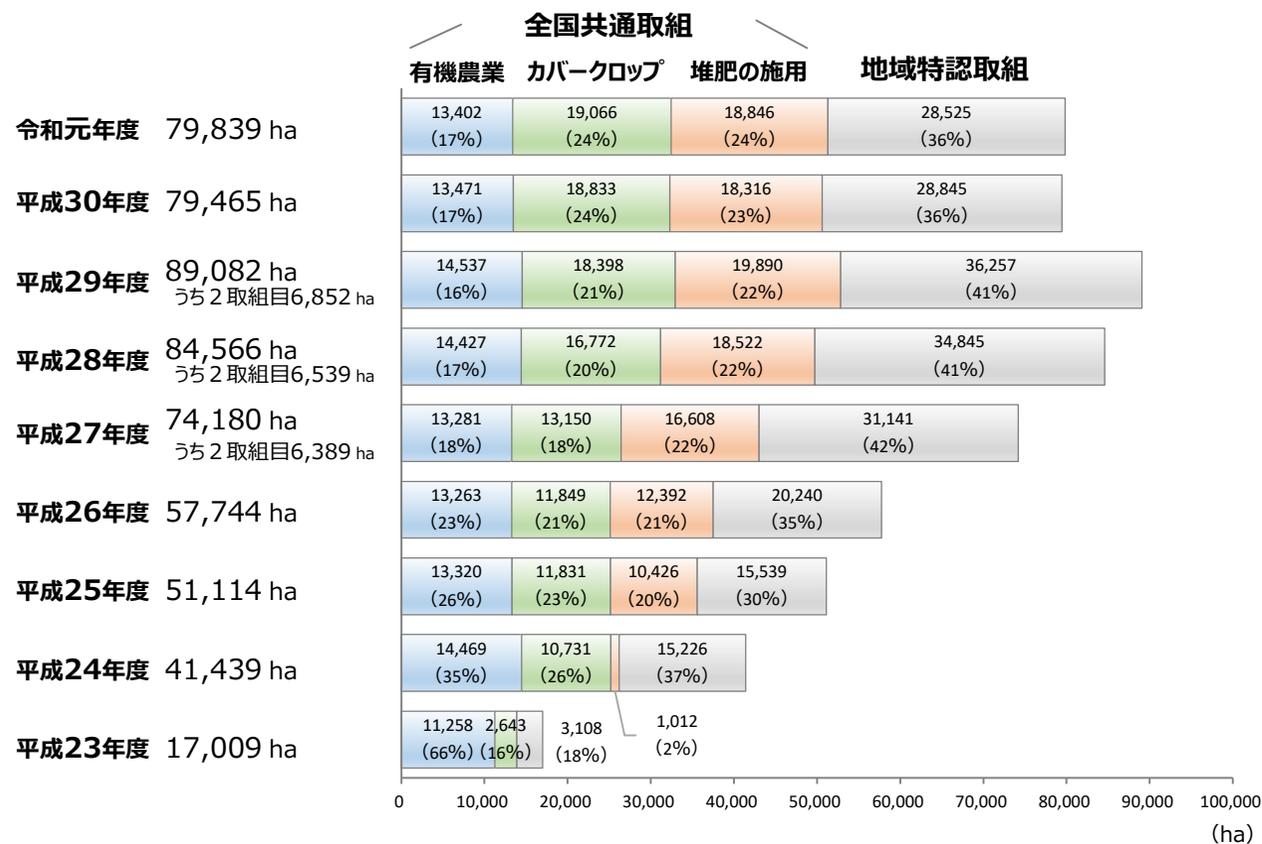
〇〇農事組合法人等、複数の農業者で構成される法人（農業協同組合を除く）



9 環境保全型農業直接支払交付金の実施状況

- 令和元年度の環境保全型農業直接支払交付金の実施面積は約8万ha。
- 平成30年度は、複数取組支援の廃止や天候不順等により、取組面積は平成29年度と比較して約9,600ha減少したが、令和元年度は平成30年度と比較して、約400ha増加した。

実施面積



実施件数、実施市町村件数、交付金額

年度	実施件数	実施市町村数	交付金額 (百万円)
令和元年度	3,479	887	4,543
平成30年度	3,609	885	4,514
平成29年度	3,822	899	4,587
平成28年度	3,740	888	4,578
平成27年度	4,081	872	4,213
平成26年度	15,920	931	3,396
平成25年度	15,240	918	3,082
平成24年度	12,985	885	2,996
平成23年度	6,622	773	1,331

※ 交付金額は、国と地方公共団体が交付した額の合計
(交付割合 国：地方公共団体 = 1 : 1)

10 第1期（平成27年度～令和元年度）における第三者委員会による評価

- 国及び都道府県は、実施要綱に基づき、交付金の交付状況の点検及び効果の評価を行う第三者委員会を設置。
- 環境保全型農業直接支払交付金の取組が計画的かつ効果的に実施されるよう、取組状況の点検や制度の効果等の検証を行い、制度に反映。
- 都道府県による中間年評価や最終評価を踏まえ、国は中間年評価及び最終評価を実施。
- 第1期において、国は平成30年度に中間年評価、令和元年度に最終評価を実施。

都道府県（第三者委員会）

交付金の取組状況の点検

- 取組面積、取組件数 等

効果の評価

- 地球温暖化防止や生物多様性保全等の効果
- 環境保全型農業の普及状況
- 農業の持続的な発展の効果
- 地域への波及・活性化の効果 等

各都道府県独自の調査・評価（任意）

- 上記項目のほか、独自に調査、評価を実施

報告

国（第三者委員会）

全国の交付金の取組状況の点検

- 取組面積、取組件数 等

効果の評価

- 地球温暖化防止や生物多様性保全等の効果
- 環境保全型農業の普及状況
- 農業の持続的な発展の効果
- 地域への波及・活性化の効果 等

**各都道府県の評価や現地調査を踏まえ
効果を評価**

環境保全型農業直接支払交付金実施要綱（該当部分）

第5 実施体制

- 1 国は、交付金による取組が計画的かつ効果的に推進されるよう都道府県に助言するとともに、交付金の交付状況の点検及び効果の評価を行う中立的な第三者機関を設置する。
- 2 都道府県は、交付金による取組が計画的かつ効果的に推進されるよう市町村及び関係団体に助言するとともに、交付金の交付状況の点検及び効果の評価を行う中立的な第三者機関を設置する。

(参考1) 第1期における第三者委員会開催実績

		第三者委員会での検討事項
平成27年度 (1年目)	第1回(11月2日)	・第三者委員会の進め方について
	第2回(3月17日)	・施策評価の進め方について
平成28年度 (2年目)	第3回(7月1日)	・試行調査の実施について ・施策評価の考え方について
	第4回(9月13日)	・現地調査 及び 環境直払実施団体との意見交換
	第5回(11月28日)	・試行調査結果の概要、課題及び改善点等について ・環境保全型農業の自律的かつ継続的な実施に向けた基本的な方向性の検討について(案)
	第6回(3月23日)	・中間年評価の進め方及び本格調査について ・交付金制度に基づく事業の実施を通じて実現すべき環境保全型農業の理想的な姿についての基本的な方向性について(案) ・施策評価の考え方について
平成29年度 (3年目)	第7回(7月10日)	・本格調査及び中間年評価について ・環境保全型農業の自律的かつ継続的な実施に向けた基本的な方向性の検討について ・施策評価の考え方について
	第8回(3月9日)	・中間年評価骨子(案) ・今年実施する調査について
平成30年度 (4年目)	第9回(9月10日)	中間年評価
令和元年度 (5年目)	第10回(5月7日)	最終評価骨子(案)
	第11回(8月22日)	最終評価

(参考2) 環境保全型農業直接支払交付金 最終評価結果 (第1期)

- 「環境保全型農業直接支払制度に関する第三者委員会」において、最終評価を取りまとめた（令和元年8月30日公表）。
- 支援対象としている取組のほとんどにおいて「効果が高い」と評価された。

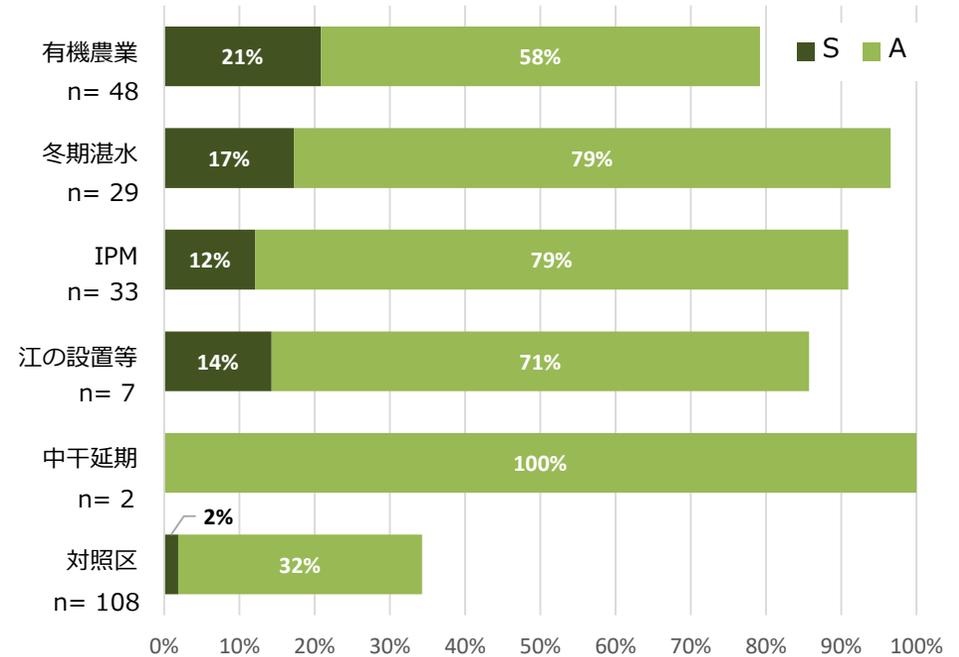
地球温暖化防止効果の評価

対象取組の種類		調査件数	単位当たり温室効果ガス削減量 (tCO ₂ /ha/年)	平成30年度実施面積 (ha)	温室効果ガス削減量 (tCO ₂ /年)
全国共通取組	有機農業	48	0.93	13,471	12,528
	カバークロープ	465	1.77	18,833	33,334
	堆肥の施用	385	2.26	18,316	41,394
地域特認取組	リビングマルチ	34	1.02	1,561	1,592
	草生栽培	30	1.09	141	154
	敷草用半自然草地の育成管理	1	1.72	3	5
	省耕起（不耕起）播種	1	1.00	21	21
	緩効性肥料×長期中干し	3	(緩効性肥料) 0.01 (長期中干し) 2.19	5,936	59 13,000
	緩効性肥料×省耕起	2	(緩効性肥料) 0.31 (省耕起) 1.00	333	103 333
	緩効性肥料×深耕	1	(緩効性肥料) 0.72 (深耕) 非評価	1	1 -
	IPM×長期中干し	3	3.87	6,523	25,244
	IPM×秋耕	7	6.85	2,281	15,625

「IPM×長期中干し」及び「IPM×秋耕」は下線部の取組における地球温暖化防止効果の評価。

計 143,393 tCO₂/年

生物多様性保全効果の評価



- S : 生物多様性が非常に高い。取組みを継続するのが望ましい。
- A : 生物多様性が高い。取組みを継続するのが望ましい。
- B : 生物多様性がやや低い。取組みの改善が必要。
- C : 生物多様性が低い。取組みの改善が必要。

※ 温室効果ガス削減量算出には「土壌のCO₂吸収量「見える化」サイト」（農研機構 農業環境変動研究センター）等を使用

※ 評価は「農業に有用な生物多様性の指標生物調査・評価マニュアル」（農研機構 農業環境変動研究センター他）に基づき実施